

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 松山 由布子

論 文 題 目

日本宗教伝承の諸位相—小野篁冥界伝承と牛頭天王信仰—

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	阿部 泰郎
委員	名古屋大学教授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学教授	塩村 耕
委員	名古屋大学准教授	東 賢太朗

論文審査の結果の要旨

○ 本論文の概要

日本における物語伝承について、その宗教文化の基盤と、地域社会および通時代的な変容と生成の様相を、その要因と共に解明することが、本論文の目的である。その研究対象として、宗教文化の中心であった京都に発する、ひとつは、歴史・文芸伝承の主人公となる人物をめぐる事例と、ふたつには、日本で独自に成立した神の縁起伝承をめぐる事例を取り上げて考察する。

第一部は、平安朝の文人・小野篁の冥官伝承が核となって生みだされた、京都の都市周縁における宗教伝承の世界を扱う。第一章では、篁の冥官説話を概観した上で、京の葬地かつ靈魂祭祀の地であった東山の六道珍皇寺が篁伝承の場（トポス）として定着し、寺院縁起の矢田地蔵縁起で満米上人蘇生譚と篁の冥官としての役割が地域や閻魔造像者としての篁伝承の展開を生み出したことを示した。第二章では、近世を軸に、京都の寺社由緒を説く地誌類によって、それらの伝承がテキスト化されつつ流通する過程を跡付けている。その焦点となったのは宇治大善寺を中心とする洛外六地蔵巡りの寺院縁起であり、また東山珍皇寺に加えて、洛北蓮台野の千本閻魔堂や嵯峨化野の福生寺があらたな篁伝承の場として成立し、珍皇寺を「死の六道」、福生寺を「生の六道」と位置付けるように、近代に至っても篁伝承が再創造されていく様相を提示する。こうした篁伝承の展開は、京都の都市宗教文化が絶えず周縁に越境することで活性化する運動として捉えられる、とする。

第二部は、京の祇園社の祭神として全国に展開した牛頭天王信仰を根拠付ける牛頭天王縁起を中心に論ずる。この縁起は、疫神攘却儀礼を基盤とした、密教と陰陽道の習合の所産であるが、古代『風土記』逸文に原型を示す蘇民将來說話を元に、陰陽道の聖典『篋篋内伝』に本格的な説話が示され、中世には『神道集』等の諸文献や各地の祇園社・天王社に独自の牛頭天王縁起が成立する経緯を整理する。更に、その地域的な受用と展開を、尾張の天王信仰の中心津島社に伝存する縁起類と、奥三河の祭祀芸能花祭の司祭者花太夫の許に伝えられた祭文類において検証する。まず第一章では、花太夫の民間宗教者としての活動の実態を所蔵文献によって修験からの伝授と陰陽師との交渉について明らかにする。第二章では更に、祭文類から牛頭天王縁起関係テキストを『牛頭天王島渡り祭文』以下をもとに分析し、それが基本的に蘇民将來說話を元にした、牛頭天王縁起の変奏で

論文審査の結果の要旨

あり、中には『牛頭天王五段式』のように津島社の『牛頭天王講式』の訓読仮名本であることを指摘する。第三章では、これらの諸祭文が花祭りを支えた奥三河の在地に伝承された宗教民俗の習俗に密接に対応し、口頭伝承として創造された消息を指摘する。

最後に、終章において、以上の具体事例から、宗教伝承がそれを生んだ地域の宗教文化の時代の変化に伴って変容しつつも、その実践の場において絶えず再創造されて宗教文化を創出していく構造を示した。

○ 本論文の評価

伝承文芸という世界は、国文学と民俗学をはじめとする人文学諸分野の学際領域に位置し、それを越境することで初めてその意義や価値を認識される対象といえよう。日本の宗教伝承を扱った本論文は、この条件を意識的に活用した、意欲的な試みである。

論ずる対象は、一方では説話上で冥顕の境を越えた文人貴族小野篁の民間伝承の場をめぐる諸言説を通時的に扱い、他方で日本で独自に形成された疫神牛頭天王の神話としての縁起が、地域の信仰圏と祭祀儀礼の中心で宗教者の行為遂行に関わり展開・生成する様相を網羅的に記述した。この、複眼的な宗教伝承世界の対象選択と視座が、本論文の大きな特徴であり、また、従来の中世文学研究を中心とした、国文学と民俗学の方法に制約された伝承文学研究の限界を乗り越えようとする企てである。これは、宗教伝承という複雑な事象を対象化するために有効な方策であり、その試みは基本的に成功を収めているといえよう。

本論文の方法論的特質は、第一に、基盤となる伝承文献資料の徹底した収集・整理・解読とその体系的分析にある。篁伝承においては、説話文献における篁説話のみならず、縁起・記録とくに近世地誌類を博搜して網羅的に検出し、およそ通時代的に京都における篁伝承のトポスの動態を具体的に示すことに成功している。花祭についても、名大による「花祭アーカイブス」構築事業に従事した成果を活用し、花太夫所蔵文献の悉皆調査を目録化をふまえ、進んでその解読分析に取り組み、縁起と祭文の詳細な比較検討を行うことで、相互の関係を解明し、祭文の独自の地域習俗や儀礼実践との関連を見出した。

第二に、如上の徹底した文献研究を元に、そこに、京都という王権都市とその周縁の文化的位相とその歴史社会的変化の要因分析を解読の視点とし、また奥三

論文審査の結果の要旨

河にあっては花太夫という民間宗教者の活動を、修験や陰陽道との交渉や民俗文化を媒介するものの所産として、あらたな儀礼テキストの創成の実態を捉え得たことは功績である。そこでは、従来の民俗学的図式によらず、都市から地域社会にわたる民間宗教者による能動的な文化創出の運動を見いだす、文学研究上の方法論的実験を企てており、それは所期の範囲でおよそ成功している。

一方で、なお課題は多く残されている。ここで扱われる伝承テキストは、宗教の信仰実践の儀礼体系とその構造の許で絶えず解説・解釈されるべきであるが、それが十分になされているとは言い難い。また、篁冥官説話が何故京都の葬送靈魂祭祀習俗においてかくも持続的に重要な役割を果たし得たのか、その問いにも十分に答えていない。そして、篁説話と牛頭天王縁起のふたつの宗教伝承を、全体として総合的に宗教伝承の世界体系に位置付ける議論がなされずに終わってしまったことが惜しまれる。しかしながら、それらは全て論者が今後の課題として自覚するところであり、更に探求の幅を広げ、考察を深めていくことによって明らかにされていくであろう。

全体として、着実な作業と適切な方法をもって日本宗教伝承研究のあらたな領域を切り拓いた労作として評価することができ、審査員一同、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい業績として一致して判断した。